

SF 小説
惑星エデン命の故郷シリーズ

第3作
『レーベンスターン伯爵家の謎』

Science Fiction
Series of Planet Eden: Homeland of LIFE

The Third Work
“Mystery of The Count Lebensterns”

作
邑 仲 宙 道

登場人物(2023年の年齢／出生年)

- 私：阿部倫子[アベリチコ]：1981年生(42歳)
- 妹：安田幸子[ヤスタキヨコ]：1988年生(35歳)
- 夫：阿部一道[アベヒサシ]：1976年生(47歳) 病院長
- 娘：阿部優香[アベユカ]：2015年生(8歳)
- 夫の父：阿部道彦[アベミチヒコ]：
 - 1947年生
 - 2011年精神科医院を開業
 - 2040年没(享年93歳)
- 夫の祖父：阿部道隆[アベミチカ]：
 - 1913年生
 - 2008年没(享年95歳)
- 伯爵：江田真武[コーダマサタケ]：
 - 1912年生
 - 1944年亡命(32歳)
 - 1960年結婚(48歳)
 - 2000年没(享年88歳)
- 日本領事館調査官：宮崎聡[ミヤザキサトル]36歳
- 日本領事館惨事：山形成浩[ヤマカタナヒロ]52歳

- 伯爵夫人 Elizabeth von Lebenstern=Koda：
 - 1940年生
 - 1960年結婚(20歳)
 - 2000年夫死亡(60歳)
 - 2023年現在(83歳)
- ラインシュタイン城管理者：Hans Schwalz
- ラインシュタイン入城口受付：Peter Kurz
- マインツのホテルフロント係：Rudorf Tempf
- マインツのホテル支配人：Adolf Schmitt
- 白髪の紳士／伯爵の執事：Otto Richter 15歳からレーベンステルン=コーダ家の用人
再生して Otto von Lebenstern(2023年時78歳)
- 警察部長：Hans Borgbund
- 警察の捜索担当官：Ludwig Bernvolk

命 Life の種類とライフ LIFE

- 再生命 Revival Life : 死後の肉体的変質の始まる前に死者を再生させることのできる命(聖命)
 - 心霊命 Spiritual Life : 死者から分離して惑星エデンで再生し、新たな肉体に侵入する命(精命)
 - 身体命 Physical Life : 受精から死亡するまでの肉体的な命(生命)
- 再生命と心霊命をライフと呼ぶ。また、惑星エデンの「命の故郷」に「命の世界」が広がる。

時間経過

- 2023年7月03日(月)ウィーン着
- 2023年7月10日(月)ウィーン発(飛行機 1°25')フランクフルト着(列車)マインツ着泊
- 2023年7月11日(火)マインツ発(バス)リューデスハイム着(遊覧船)ライン湖畔古城巡り、マインツ泊
- 2023年7月12日(水)午前マインツ発(列車)ボン着泊/午後夫はラインシュタイン城着
- 2023年7月13日(木)午前ボン市内観光/夜夫ボン着せず私と娘はボン発(列車 1°30')マインツ着泊
- 2023年7月14日(金)午前ラインシュタイン城、シュヴァルツ氏と遭遇、警察、マインツ泊
- 2023年7月15日(土)午前フランクフルト日本領事館/午後ホテル、警察情報
- 2023年7月16日(日)マインツの街を娘と散策、レーベンステルン伯爵夫人の情報収集
- 2023年7月17日(月)午前伯爵夫人との接触機会を警察から提言/妹の来独
- 2023年7月18日(火)午前警察・領事館の人たちと共にフリートベルク城訪問し伯爵夫人と会合
- 2023年7月19日(水)午前夫の洗浄処置開始、私たちは伯爵夫人の好意で城に宿泊
- 2023年7月26日(火)午後洗浄処置終了
- 2023年8月02日(火)午後再適応期間終了
- 2023年8月03日(水)夫と娘、そして私の妹の4人でボンとベルリンの旅行
- 2023年8月10日(水)ドイツ発
- 2024年9月10日(火)事件の回想

①私の夫、阿部一道[アベ・カズミチ]の失踪事件が解決してから、今年で1年になります。夫の失踪は、平凡な家族旅行の最中におきたことでした。理由もわからぬ夫の失踪に私はひどく動揺しながら、当時8歳の娘を連れて、夫と最後に別れたドイツ・ライン川周辺を、1か月ほど探し回りました。そして、失踪事件は想像を絶する結末を迎えて解決しました。帰国後も夫はこれまでと同様に、私たちと幸せな生活を送っています。それでは、キツネにつままれたようなお話ですが、少しの時間を頂きお聞きいただければ、私にも事件の全容を整理するのに役立つことですので嬉しく思います。

夫が失踪したのは、2023年7月のことです。それまで夫、娘そして私の家族三人で、世間的には幸せな暮らしをしておりました。夫の父が開設した精神科医院を夫が受け継ぎ、100床の精神科病院に増築し、夫は自ら院長として勤務をしておりました。病院経営は順調で経済的に困ることはありませんでした。この状況の中で私は良き妻であったかどうかは分かりませんが、私のできることは精一杯やってきたつもりです。娘は利発で私たち夫婦にとりましても希望の星で、時にてこずらせることがあっても、夫婦の期待に応じて娘は頑張ってくれました。このような私たち家族に今回の出来事が起こるとは夢にも思いませんでした。

2023年夏、夫は幸運にも3週間の長い休暇が取れることになり、夏休みに入った娘と私の3人で、オーストリアとドイツを旅行することにしました。クラシック音楽の好きな夫は大喜びでした。ウィーンの街では路上音楽家のバイオリンやギターの演奏を楽しみ、国立劇場ではウィーン・フィルハーモニーとワグナー歌手による有名なアリアのコンサートに行き、夫はまるで子どものように有頂天になっていました。夜はウィンナ・ワルツを演奏するドナウ川河畔のレストランの野外テラスで、不器用ながら二人でワルツを踊りました。20歳代のカップルに戻ったように元気いっぱいの私たちに、娘は呆れ顔でした。また、オプション・ツアーでザルツブルグに行き、大聖堂でモーツアルトの音楽やトラップ家ゆかりのエーデルワイズの歌に心なやませました。このようにして7日間のオーストリア旅行は夢のように過ぎていきました。

次の旅はライン川周辺の古城めぐりで、その後、ボンとベルリンを旅することにしていました。私たち家族はリュードスハイムから遊覧船に乗り、ライン川から古城をめぐることにしました。遊覧の途中、船を降りて、幾つかのお城を徒歩で観光しました。今から思うと、ラインシュタイン城を訪れたときに夫の様子が変わったように思いましたが、その時はそれ以上、気に留めていませんでした。その後、夫の様子はいつも通りになり、ライン川遊覧の間も娘のジョークに笑い、美しい景色に酔い痴れながら楽しい時間を過ごしました。

ラインでの最後の夜、夫が突然、もう1日延泊したいので私と娘は先にボンに行って欲しいと言い出しました。私も娘もただ啞然として夫の話を聞いていましたが、「何かあったの？」という質問に「後で話すので今は聞かないで欲しい。」と答えるばかりでした。「じゃ、私たちも一緒に残るわ。」と切り返すと、夫は困惑気味に、「その必要はないよ。一緒に残っても僕とは別行動になるので。」といます。私は「別行動ってどういうことよ。」と少々、腹立たしい気持ちで尋ねました。「明後日、ボンで合流したら全て話すよ。君が心配するようなことは何もないよ。申し訳ないけど、1日だけ僕に時間をもらいたいの

今回だけは何も聞かずに、お願いするよ。」

結局、私は夫の意思を受け入れ、翌朝、娘と二人で予定通りにボンへ行くことにしました。マインツの駅まで夫は見送りに来ました。娘は父と別れて旅をすることに最初は淋しくて涙を流すこともありましたが、旅先の風景や行きかう人々の様子、駅で売られているお土産品、などを見て少しは気持ちが晴れたようでした。でも、私は説明のないままに夫が突然、ライン河畔に残ると言い出したことに納得できず、頭の中では同じ疑問が走馬灯のように繰り返されていました。しかし娘の前ではできるだけ気丈夫にふるまうようにして、外目にはドイツ旅行を楽しんでいる母娘に見えたと思います。

②私たちは昼前にボンへ到着しました。夫とはスマホで連絡を取るようになっていたので、夫からも折々、メールや電話がかかってきました。ボンのホテルに荷物を預け、娘と二人でホテル周辺の街を探検に出かけました。途中見つけた日本料理店で久しぶりに名ばかりの日本料理を楽しみました。夕方、ホテルに戻り荷物を整理して、ホテル近くのレストランで夕食をとりました。ドイツ料理のカリーヴルストのソーセイジや馬鈴薯が美味しく、お腹いっぱい食べました。周りの人たちが飲んでいるボンシュ・ビールが珍しかったのですが、私は元々アルコールに弱く、娘の手前もあり飲みませんでした。1時間ほどしてホテルに戻りました。夫に連絡を取りましたが、呼び出し音だけが空しく鳴り続けるだけで夫は電話に出てきませんでした。その後も何度か電話やメールをしましたが、何も返事がありません。気がかりでしたが、明日の夕方には夫もボンに到着する予定でしたので、とりあえず娘と旅での思い出や娘の買ったお土産の話などをしながら寝ることにしました。

翌朝、朝食を済ませ、夫に連絡をしました。今度も夫から返信はありません。夫は普段、朝寝坊という訳ではなく、この時間ならば起きているはずです。私は不吉な胸騒ぎを覚えました。ライン河畔に戻ろうかと思いましたが、夫の来る予定の夕刻まで待つことにし、1時間おきに連絡をとりました。しかし何度連絡をしても夫からは返事がありません。その様子を見ていた娘も気にし始め、「パパ、どうしたのかな。病気になったのかな。」と心配そうな表情で、私に尋ねるわけでもなく、独り言のように話していました。この日はボン市内の観光ツアーの予定でした。気は乗らないものの、少しは気晴らしになるかと思いつァーに参加してみました。ガイドがあれこれと説明していますが、ほとんど耳に入らず、スマホをしっかりと手に握り締めたまま、他のツアー客が観光に出てもツアー・バスの中で居残りばかりしていました。娘も普段はおしゃべりで困るほどなのに、ほとんど口を利きません。時々、私の顔を見てため息をつき、不安な表情を私に見せないようにうつむいていました。

その日の夕刻になっても夫から連絡はありません。私はもはやパニック寸前の状態でした。娘も突然泣き出し、私たちは困惑の極にありました。マインツに行く夜行列車にはまだ間に合いそうだったので、ホテルをチェックアウトして列車に飛び乗りました。マインツには20時前に到着するため、前に宿泊したホテルを列車の中から予約しました。私は英会話には自信がありますが、相手の方が英会話に不慣れでドイツ語混じりになると困ることもあります。それでもこれまで何とかやってきました。マインツのホテルも私の英会話力で予約がとれました。その晩は静かすぎるホテルの部屋でしばらく寝付かれませんが、それでもいつの間にか眠ったようです。

翌朝、私と娘はタクシーをたのみ、ライン川古城巡りの遊覧船出発地リュースハイムに行きました。チケット販売所や船舶会社など、夫の訪れそうな場所を探して回りました。そこで夫の写真をみせ、心当たりがないかを尋ねました。手掛かりになりそうな話はありませんでした。稀に夫のことかと思える話を耳にして、さらに詳しく話を聞いていくと別人のことであることがわかり、気落ちすることもありました。それでも気が張り詰めていたためでしょうか、気持ちを持ち直して夫の手がかりを探し続けました。しかしこの日は夫の情報を得ることはなく終わりました。

二日目、夫と一緒に乗った遊覧船に乗り、訪れた古城をもう一度巡り、何か夫の失踪に関連した手掛かりがないかを調べてみることにしました。中でも、観光の後に城から出てきたときに夫の様子が急変したラインシュタイン城を丹念に見返してみました。城内を歩くうちに家族三人で観光した時の思い出が蘇ってきて目から涙が溢れてきました。娘は私の様子を見て心配そうに私の手にしがみついていた。私はただ、お城に展示してある甲冑の前で佇むばかりでした。

③その時、初老のドイツ人男性が私に声をかけてきました。彼は見事な日本語を話しました。「私はこの城の管理をしていますハンス・シュヴァルツといいます。何かお困りのことがあるのでしょうか。」私はハッと我に返り、娘の手を強く握りしめながら彼の顔を見ました。「ご心配をおかけしました。急にめまいがしたものですから。」「大事がなければ良いのですが。数日前にも当城をご覧になられておられましたね。その時はご主人さまも一緒だったと記憶しています。」私は救世主にでもあったように、もう一度、彼の顔を見つめました。「よく覚えていてくださいますありがとうございます。」「いえいえ、日本語を話しておられたのでその折にお声掛けをしようと思ったのですが、貴女様とお嬢様は見学の道順を先に進まれて行かれましたのでお声掛けする機会を失い、後に残られたご主人様のご様子を見ておりました。すると、私より少し年上と思われる男性がご主人様に近づいてきてご主人様に声をかけておられました。その男性は私と同じドイツ人のように見えたのですが、大変、丁寧な日本語を話していたのでとても印象に残っています。」

私は夫の秘密の一端を解くカギをみせられたように思いました。「あの、夫に話しかけてきた男性はご存じの方でしょうか。」「いえ、私も初めて見る方ですが、物腰や丁寧な言葉遣いから身分の高い方にお仕えしている侍従のように見えました。お二人はこの場所で何か話をされていました。その後、お相手の男性は丁寧にお辞儀をされてこの場を去られました。その後、ご主人様は何か浮かない顔をしておられたのがとても印象的でした。お悩みになっておられるようにも困惑されているようにもみえて、何とも言いようのない表情でおられました。そしてご主人様はお二人の後を追うように出ていかれました。」私はその時の夫の急変した表情を思い出しながら、やはりここで何かが起こったのだと確信しました。

私はさらに尋ねました。「その後、夫やその男性を見られたことはありませんか。」「残念ですが、その後はお目にかかることはありません。」私は意を決し彼に夫の失踪について手短かに話をしました。そして「もし夫やその男性に出会うことがありましたら、あるいは二人に関わる情報を耳にされましたら、すぐに私にご連絡をいただけませんか。」と依頼して、私の電話番号とメールアドレスを伝えまし

た。シュヴァルツ氏も自分の連絡先を教えてくださいました。夫と話をしていた男性は、この城の関係者ではないことから、入城口の職員にも話を聞いてみようと思いました。シュヴァルツ氏は入城口の職員の名前を教えてくださいましたと娘を案内して教えてくださいました。

入城口の若い男性職員がシュヴァルツ氏の呼びかけに応じて顔を出してきました。ただ彼の英語力は不十分だったため、シュヴァルツ氏が私と職員の間で通訳をしてくれました。職員はペーターといい、夫と私が入城した日は別の職員が勤務をしており、ペーターさんは別の仕事をしていたとのことでした。私は少し残念な気持ちになりました。続けてペーターさんとシュヴァルツ氏はドイツ語で何か話していましたが、シュヴァルツ氏が興奮した表情で、新しい情報を聞き出せたと言って、気落ちしている私に声をかけてきました。「ペーターはあなた方の入城した翌日が勤務日でした。その午後にご主人と思われる東洋人男性と白髪の紳士と一緒に城から出てきたそうです。ドイツ人らしい紳士が『日本』という言葉を繰り返しながら東洋人男性に話をしていたので印象に残ったとのことでした。東洋人男性は困惑した表情でこの紳士に応じているようで、紳士の物腰が丁寧であるにもかかわらず、東洋人男性に対しこれ以上後には引かないという強い態度もみられたので奇妙に思ったそうです。そして二人は船着き場の方に向かったとのことでした。防犯カメラに二人の写真が写っている可能性があるので調べてみるとのことでした。分かりましたらご連絡しますのでホテルでお待ちください。」私は秘密の世界にさらに一步入り込んでいく緊張と不安を覚えながら、シュヴァルツ氏とペーターさんに礼を言ってホテルに戻ることにしました。

ホテルに戻り、娘とホテルのレストランで昼食をとりました。娘はこの数日の出来事で疲れているようで、いつもの無邪気な笑い声はなく、ケーキを少し食べたただけでした。娘に休息をとらせたいと思って部屋に戻り、無口な二人で窓越しにライン川の風景を眺めていました。その時、シュヴァルツ氏から携帯にメールが届きました。城の防犯カメラに写っていた夫と白髪の紳士の写真が3枚添付されていました。写真に写った顔は鮮明とは言えませんが、十分に顔の識別ができるものでした。これで夫の失踪に関するはっきりとした証拠が、やっと手に入りました。私はこの紳士が夫との接点を探るため、同じホテルを利用している可能性があると考え、このホテルのフロントにも尋ねてみようと思いました。娘はいつの間にか疲れてソファで寝ていたのでそっとベッドに運び、寝かせたままにして私だけがホテルのフロントに出向きました。フロントの職員とは顔なじみになっていましたので、夫と一緒に写っている紳士についてあまりたじろぐこともなく尋ねてみました。

④ 顔なじみになったホテルのフロント職員はルドルフという青年でした。彼の他にも数人のスタッフが受付をしています。送られてきた白髪の紳士の写真をルドルフさんにみせて、見覚えがないか尋ねました。ルドルフさんはしばらく考えているようでしたが、「少し待ってください。」と言って別のスタッフにも写真を見せていました。戻ってきて「見覚えがあります。他のスタッフにも確認しましたがこの紳士が宿泊していたと言っています。」ルドルフさんには夫の失踪したことを話してありましたので、ルドルフさんに詰め寄りながら「この紳士のお名前やお住まいを教えてくださいいただくことはできませんか。」と尋ねました。ルドルフさんは少し考えていましたが、支配人に許可をもらえれば宿泊台帳の名前や住所を教えることができるかもしれないとのことでした。私は返事をもらうまで部屋で待つことにしました。

部屋に戻ると娘はまだ寝息を立てて寝ていました。部屋で1時間ほど待っていると、ルドルフさんと支配人が部屋にやってきました。支配人は丁寧にお辞儀をして「私はシュミットです。」と自己紹介して話し始めました。「ルドルフから事情は聞きました。ご主人様が失踪され、大変ご心配なことと思います。防犯カメラに写っている紳士がご主人様の知人なのかそうでないのか、失踪にこの人物がかかわっているのかいないのか、まだわからないことがあります。つまりご主人様の失踪は、事件なのか事故なのか、それともご主人様のご意思による行動なのか、判然としていません。紳士に関する情報を提供するには、とりあえず事件の可能性があるととして地元の警察に捜査願を出され、警察の関与する中で情報を提供したいと思います。」と支配人は冷静な態度で淡々と説明しました。私も警察の協力がなければこれ以上、調べようもないとは思っていましたので支配人の提案に同意しました。

夕刻、娘と共に地元警察を尋ねました。担当部署を探し、担当官にこれまでの経緯を話し、防犯カメラに写った夫と紳士の写真を提供しました。担当官のベルンフォークト氏は事務的にいくつかの質問をし、日本領事館にも相談するように指示をしました。1時間ほどで、捜査願の手続きが終わりました。その間、退屈そうにして私の側に座っていた娘は、不安と疲労などで放心したような表情でいました。沈黙したまま二人は警察署を出てホテルに戻りました。今夜はゆっくり休むことにしました。

翌朝、疲れから朝8時過ぎまで寝ていました。今日はフランクフルトの日本領事館に出かけることにしました。連日の移動で娘も私も疲れ切っていました。でもこのままにしておけることではありません。体に鞭打ってできることをしなければと不安と失意の中でベッドから起き上がりました。娘と遅めの朝食をレストランで済ませ、フロントの前を通りかかるとルドルフさんが綺麗な英語で声をかけてきました。今朝は夜勤上りでこれから非番になるのでフランクフルトの日本領事館まで車で送ってくれる、という彼の申し出でした。疲れた私には本当に嬉しい申し出でした。9時30分にホテルの玄関で待ち合わせをして部屋に戻りました。娘は昨晚よく眠れたようで少し元気になっていました。

約束の時刻にホテル玄関に行きました。ルドルフさんが小型のドイツ車で待っていました。私には彼にお礼を言って娘と一緒に乗せてもらいました。ルドルフさんはフランクフルト郊外のマンションに両親と一緒に住んでおり、このホテルまで通っているのだそうです。領事館は彼の家からさらに街の中心にあり、40分くらいかかるとのことでした。彼の申し出は疲れた心と体の私には最良の慰めでした。フランクフルトまでハイウェイを走りました。フランクフルトの町並みが見えてくると、それは高層ビルの林立する大都会でした。夫とウィーンから来た時には古城めぐりのことに話題が集中してフランクフルトの町は見ているようで見ていませんでした。改めてフランクフルトという街の大きさに驚きました。ルドルフさんに感謝の気持ちを伝えて、領事館のあるビルの前で別れました。

⑤ 日本領事館は高層ビルの中にありました。受付で来館理由を説明すると、受付職員が少し待つようにと指示しましたので、待合室の椅子に娘と並んで座りました。他の来館者を眺めながらその数の多いことに驚き、この街が日本とかかわりの深い都市であることを再認識しました。やがて先ほどの職員が現れ、私たちに別室に案内しました。そこは面接に使う部屋なのかイスとテーブルが置いてあるだけの

殺風景な小部屋でした。椅子に座って待つように案内されてから数分もしないうちに、若い男性が現れ、宮崎という名前だと自己紹介をしました。私は娘を促して椅子から立ち上がり、私たちの名前を告げて挨拶をすると、宮崎さんは椅子に座るように手で合図をしました。私はこれまでの出来事を話し、マインツの警察から領事館に報告しておくように言われて来館したことを伝えました。宮崎さんは補足的な質問をしてから、夫の特徴や写真などを求めました。失踪に事件性があるかが重要な点であると言われ、領事館としても地元警察と協力して捜索をするので領事館にも協力することを求められました。このためしばらくマインツかフランクフルトに滞在して欲しいとの申し出もありました。この旨を夫の病院に連絡し、夫や私の家族にもドイツ滞在の延びることを伝えることを約束しました。また、夫の家族から娘の学校にしばらく休学することを伝えてもらうことにしました。

娘と遅めの昼食をソーセージ・レストランの“パウラナー”で済ませました。その後、中央駅からマインツ行きの列車でホテルに戻りました。ホテルのフロントに何か連絡がないか尋ねましたら、警察から連絡があったとのことでした。その瞬間、私の心臓が高鳴りました。部屋に戻り、娘を休ませてから指示のあった電話番号に電話をしました。捜査願の調書を作成した担当官ベルンフォークト氏が電話口に現れました。ベルンフォークト氏の話は次の通りでした。白髪の紳士の名前はオットー・リヒターといい、レーベンステルン＝コーダ伯爵夫人エリザベートの執事で、顔照合で 98%の一致率で認定されたが、不可解なことにリヒター氏は 2020 年 7 月享年 68 歳で交通事故のため他界していた、ということでした。3 年も前に亡くなった方が夫と同伴しているのは理解できません。ベルンフォークト氏はこの説明として、①リヒター氏にうり二つの人物、例えば双生児のもう一方、②リヒター氏に似せて仮装した人物、が想定され、①は戸籍などの調査で可否は判明できるので現在、調査中とのことでした。しかし②の場合には事件性も出てくるので①が否定された段階で拉致・誘拐も視野に調査を始めるとのことでした。

3 年前に亡くなったリヒター氏と思われる人物が夫とどんな関りがあるのか、関りがあるのであればここで二人は知り合ったのか、そしてリヒター氏は夫に接近する機会を探るために私たちと同じホテルに宿泊していたのか、では何が目的で接近してきたのか、などいろいろの疑問が浮かんでは消えていきます。そのどれもが漠然として答えようもない疑問ばかりでした。ただリヒター氏がレーベンステルン＝コーダ伯爵夫人の執事であったという新しい手掛かりが得られましたので、その伯爵夫人に会ってリヒター氏のことを尋ねたいという思いが湧き上がってきました。そこで伯爵夫人を訪ねる方法を相談するために、来週月曜日に警察担当官のベルンフォークト氏に尋ねることにしました。

この数日は娘にも私にもめまぐるしい毎日で疲れきっておりましたので、今日の日曜日は休養を兼ねてマインツの街をゆっくり散策して、心身を休めることにしました。マインツ大聖堂やゲーテンベルク博物館など観光名所をいくつか周り、カフェでゆっくりとした時間を過ごしました。娘は私への気遣いから元気そうに振舞い、笑い声をあげたりしていましたが、彼女も不安や淋しさを隠し切れないうでした。私はカフェでレーベンステルン＝コーダ伯爵夫人についてスマホを使って調べてみました。詳しい情報は得られませんが、それでも次のことが分かりました。

①レーベンステルン家は 12 世紀ごろからドイツ史上に現れ、時の領主を補佐。

②第 2 次世界大戦中、ナチの命を受けてフランクフルト近郊のフリードベルク城に転居。

③日本から亡命した江田真武[コウダ・マサタケ]伯爵とレーベンステルン家の長女エリザベートが戦中に結婚。

④戦後、レーベンステルン家は断絶。

⑤2000年にレーベンステルン=コーダ伯爵家の当主マサタケ死亡。

翌月曜日朝、警察のベルンフォークト氏に連絡をとりました。エリザベート伯爵夫人と拝謁する方法を尋ねるためでした。ベルンフォークト氏はそのチャンスのあることを私に伝えようと思っていた矢先に、神様の差配なのか私から連絡を受けたとのことでした。1週間後に、地元サッカーチームのアイントラハト・フランクフルトとフランスのチームの親善試合がマインツのスタジアムで開催される予定であるため、今朝、警察署長が警備方法についてフランクフルト・チームの後援者代表であるエリザベート伯爵夫人に報告したとのことでした。その折にベルンフォークト氏が日本人医師の失踪事件について捜査官と家族の面接を申し込んだところ明日の午後フリートベルク城の接見室で会うことになったとのことでした。これは私にとってまたとない幸運なことで、是非同行させてほしい旨を伝えました。幸い今日の午後、院長秘書をしている私の妹の安田幸子[ヤスダ・ユキコ]が私と娘を援助するためにマインツに到着します。彼女は独仏英の言語に精通し、以前は旅行会社のプランナーや添乗員をしており、海外旅行にも慣れていますので本当に心強い助っ人になると喜んでいました。一方、娘を帰国させようかとも考えましたが、娘は私と一緒に夫を探したいと言い張って聞かないため、娘の同行は大変ですが残すことにしました。このこともあって妹のサポートは本当にありがたいことでした。

⑥捜査官ベルンフォークト氏の運転する車に警察部長のボルクブント氏が乗り、さらにベルンフォークト氏の計らいで私たち3人は他の警察車両に乗せてもらうことになりました。私たちは朝早くマインツを出てフランクフルトのフリートベルク城に到着しました。城門を入ると駐車場があります。そこで日本領事館惨事の山形成浩[ヤマガタ・ナルヒロ]氏と合流しました。お城は現在ヘッセン州の役所としても利用されており、樹木はきれいに手入れされていました。私たちは城内の接見室に通されました。部屋には彫刻の施された大きな長テーブルとそれを囲むように布張りの椅子が10脚程度並べられていました。私たちは椅子に座り5分くらい待ちました。やがて毛の長い白猫を抱いた80歳くらいの女性と白髪の男性が部屋に入ってきました。私たちは椅子から立ちあがり、軽く会釈をして二人の入室を迎えました。顔をあげて付き添いの男性を見たとき、私は一瞬息を呑みました。その男性はまぎれもなく夫と写真に写っていた白髪の男性でした。男性は伯爵夫人の椅子を後ろに引き、伯爵夫人を座らせました。そして静かに夫人の側の椅子に自分も腰掛けました。私たちは伯爵夫人の合図で椅子に座りました。そして伯爵夫人は「皆さんよくおいでになりました。私はエリザベート・フォン・レーベンステルン=コーダといいます。こちらは執事のオットー・フォン・レーベンステルンです。」と挨拶をしました。そして私たちのために時間をとっていただいた伯爵夫人に、マインツ警察部長ボルクブント氏が謝辞を述べた後、捜査官のベルンフォークト氏、日本領事館惨事の山形成浩氏、そして私と妹、最後に娘を順次紹介しました。伯爵夫人は紹介のあるたびに一人一人に目を配り軽い会釈をしました。

次いでベルンフォークト氏が席を立ち事件の概要を説明し、ラインシュタイン城で失踪した阿部一道氏とオットー・リヒター氏と思われる人物が対面している防犯カメラの写真について確認していただき

たいこと、そして阿部氏の失踪について情報をお持ちであれば伺いたいこと、などを説明しました。静かに話を聞いていた伯爵夫人が口を開きました。「ラインシュタイン城で阿部氏と会っていたのはこちらにいます執事のオットー・フォン・レーベンステルンです。」その後を継いで、オットー氏が「伯爵夫人のご指示で、私が阿部氏の宿泊するホテルに行き、阿部氏と接触する機会を図っておりました。偶然、ラインシュタイン城で阿部氏が一人になられたので阿部氏に接近して声をお掛けしました。その翌日にも同城で阿部氏とお会いして当城にお連れいたしました。」伯爵夫人がその後を継いで「阿部氏にご相談したいことがあり、オットーに指示して阿部一道氏に来ていただきました。」

そこでベルンフォークト氏が尋ねました。「差し支えなければそのご相談とはどのようなことだったのでしょうか。またどうして阿部氏のご家族には内密にされたのでしょうか。」しばらく沈黙が続きました。やがて伯爵夫人が「それにお答えするには阿部氏の祖父・道隆[ミチタカ]氏の時代に遡る必要があります。」と口を切り、白ネコを床に降ろしました。白ネコは部屋の奥にある豪華なソファに駆け寄り、ソファの上で“吾輩の寝所”とでも言わんばかりに、私たちに顔を向けて白い毛玉になりました。そして伯爵夫人の話は以下のように続きました。

「阿部道隆氏は第二次世界大戦のとき、天皇陛下をお守りする近衛第 1 師団歩兵大佐でした。また、後に私の夫になる江田真武は天皇の伯爵でした。江田伯爵は日本が米国を敵にして戦争を拡大することに反対しており、戦争を推進したい軍部から疎まれていました。軍部は近衛歩兵の一部を巻き込み、江田伯爵を暗殺する計画を立てました。この計画を察知した阿部大佐は江田伯爵を防護するため隠密裏に部隊を組織していました。暗殺決行日に阿部大佐は江田伯爵邸に信頼できる兵卒を率いて邸内に布陣しました。軍部とこれに同調する近衛歩兵たちが伯爵邸を襲いましたが、阿部大佐の勇敢な防衛によって江田伯爵の暗殺計画は失敗に終わりました。しかし阿部大佐はこの防衛戦で重傷を負い、江田邸で 3 日後に亡くなりました。天皇が信頼する人物で米国との開戦に反対する者がいなくなれば、天皇の終戦宣言は出されず、軍部の無謀な戦略によって日本は焦土となって地上から消滅することになったでしょう。そのためにも阿部大佐は大切な人物でした。」

ここまで伯爵夫人は話をして、息をつきました。執事が耳元で伯爵夫人にささやき、伯爵夫人は軽くうなずきました。執事は静かに部屋を去りました。伯爵夫人は次の話をどのように切り出そうかと考えているようでした。そこに侍女たちがお茶をもって部屋に入ってきました。執事の指示で侍女たちはティーカップを私たちの前に並べ始め、別の侍女がコーヒーか紅茶を注いでいきました。さらにほかの侍女は小皿にクッキーを分けていました。全員に飲み物とスナックが配られると、伯爵夫人が「皆さん、どうぞお召し上がりください。」と合図をしました。そして「お茶を召し上がりながら私の話をお聞きください。」と言って話を続けました。

⑦「私どもの名前からお気づきかもしれませんが、私たちは地球とは別の惑星から来た者です。その惑星は天の川銀河の中心部近くにあり、私たちはエデンと呼んでいます。私たちの先祖は、21 世紀に核戦争と異常気象などで人類絶滅の危機に陥り、植民惑星を求めて巨大な宇宙船テロックを建造しました。世界から選ばれた 10 代と 20 代の若者を乗せ、長い年月の末に惑星エデンに着きました。地球を出てか

ら1万年が経過してエデン人たちは生物学的にも科学的にも飛躍的な進歩をとげました。

むろん現在の地球は人類絶滅の危機にはありません。それはエデン人が時空間を超えて移動する技術を開発し、過去の地球に戻り、人類絶滅の危機につながる核戦争を防ぐなどをして、地球の歴史を変えたためです。この経緯は古くは旧約聖書に反映されており、惑星エデンとエデンの園、宇宙船テロックとノアの箱舟、時空間通信とモーゼの聖櫃、などがその例です。私たちエデン人の干渉で人類絶滅の危機をかわろうじて逃れた地球は、人類絶滅に至ったエデン人の地球テラとは異なるパラレルワールドに移動しました。皆さんはこのパラレルワールドの地球で生活をしているわけです。一方、現在のテラでは人類はほぼ絶滅し、荒廃した惑星になっています。」

伯爵夫人は私たちの反応を確かめるように私たちの顔を見回し、さらに次の話を始めました。

「また惑星エデンには人類にとってもう一つ重大な役割があります。それは命の故郷です。エデンは人間が誕生した楽園です。私たちの肉体が死を迎えると霊的な命が肉体から抜け出し、時空間を超えて惑星エデンの命の故郷に戻ってきます。命の故郷で記憶をほぼ消去して再生された命は、新たに受精した人間の肉体に宿ります。

また、エデン人は名前や身体にエデン人であることを示すものがあります。江田伯爵は重傷を受けた阿部大佐の胸に六芒星の印のあることに気付きました。六芒星はダビデの星としてユダヤ人のシンボルになっていますが、本来はエデン人たちが使っている印です。六芒星は2つの正三角形が組み合わされています。2つの正三角形は2つの地球を表しています。1つはエデン人の先祖たちが去ったテラ、2つ目は崩壊の危機を回避してきた地球です。六芒星で江田伯爵は阿部大佐がエデン人の末裔であることに気付きました。そして阿部大佐は天皇の信任が厚く、天皇が終戦の英断をされる際には阿部大佐の存在が重要であることを考え、江田伯爵は阿部大佐の復活を図ったのでした。」

伯爵夫人はコーヒーを一口飲み、息をつきました。伯爵夫人の話を聞いている私たちは、まるでキツネにつままれたようで、伯爵夫人の話をどのように理解しているのか分からず、皆、困惑を隠せませんでした。妹の幸子が小声で私にささやきました。「伯爵夫人のレーベンステルンは命の星という意味だし、江田伯爵の江田はエデンと読めるよね。この人たちは私たちの遠い未来から戻ってきた人ということね。そして人類の破滅を陰で防ごうとしていると。」一方、警部や惨事の様子を見ると、慥然とした表情の中に納得できなくはない、というような不思議な表情でした。そして伯爵夫人が再び話を始めました。

「私たちの肉体の命が終わると霊的な命が肉体から離れていきます。通常はそれで亡くなった方の人生が終わります。しかし肉体が変質する前にこの霊的な命に特殊な操作を加えると霊的な命は復活の命になり、死者の肉体を復活させる力を持ちます。江田伯爵は阿部大佐の霊的な命にこの処置を行い、阿部大佐を復活させました。阿部大佐の復活によって日本は廃墟になる道を回避できました。しかし江田伯爵は軍部に命を狙われていましたので、同盟国ドイツのレーベンステルン家を頼って亡命しました。そして私と江田伯爵は愛し合うようになり、結婚後にフランクフルトに居を移しました。」

⑧ 伯爵夫人は一息入れて「ここまでで何かご質問はありますか。」と尋ねられました。すると警部が立ち上がって質問をしました。「それではお尋ねしたいのですが、伯爵夫人も執事の方も、そしてお亡くなりになった江田伯爵と阿部大佐も惑星エデンの人間なのですか。ならば皆さんがエデン人であることを証明するものはございますか。」伯爵夫人は笑顔でお答えになりました。「執事のオットー以外はエデン人と思います。ただ、私たちが地球に来ましたのは少なくとも数世紀以上も前のことです。惑星エデンとの通信は必要に応じて行っておりますが、私どもも地球で暮らし、結婚し、子育てをし、そして死んでいくという人生を営み、地球人と何ら変わりのない生活をしてきました。

阿部家のご先祖に安倍晴明[アベ・ノ・セイメイ]がおられました。清明という名は恐らく私たちのレーバンステルンと同じようにエデン人を示すと思われます。主に日本に住むエデン人では『せいめい』という名前の『せい』は『いきる』の生の他に、『きよらか』の清、『せいしん』の精、『ひじり』の聖などの漢字を当て、『めい』には『あかり』の明や『いのち』の命をあてています。阿部の『清明』はこの慣習に倣って付けたと思われます。また、京都などに阿部一族を祭る阿部神社があり、神社の印や阿部家の家紋は五芒星ですが、五芒星は六芒星に共通するものです。」

伯爵夫人はさらに次のような話をしました。

「先ほどお話をしたように、執事のオットーはエデン人ではありません。私が江田伯爵と結婚した 20 歳の時から頭脳明晰なオットーは私たち夫婦の用人として働き、エデン人のことや命のことを理解してくれています。3 年前にオットー・リヒターの死亡届を出したのは、オットーが私の用事で外出中に自動車事故にあい、死亡したためです。幸いオットーの遺体には損傷が少なく、事故にも事件性がなかったため、当時の警察署長さんをお願いして検死をできるだけ早く進めて頂きました。オットーの遺体は事故後 5 時間で当城に戻ってまいりました。遺体は冷凍保存されていたので先に私が処理をしておきました復活の命をオットーの遺体に戻しました。それによってオットーは復活しました。しかしオットー・リヒターの死亡届は既に提出してしまっていたので、オットー・フォン・レーバンステルンという名前に変えて、レーバンステルン家の遠縁の者を後任の執事に就任させたことにしました。他にご質問はありませんか。」

妹に通訳してもらい、私は次の質問をしました。「私は阿部一道の妻です。夫が突然、消息を絶ち、ひどい不安と困惑の中で、私は幼い娘を連れて夫の失踪後の道筋たどって、やっとこちらにたどり着きました。是非、夫がこのお城にうかがってからのことをお聞かせください。」

伯爵夫人は憐みの目で私の話を聞いていました。そして伯爵夫人は次のように説明をしました。

「幼いお嬢様を連れ、ご主人様が姿を消されてから当城にたどり着くまで、どれほどご心労をおかけしたことか、お察し申し上げます。そしてこれ程の悲痛な思いをおかけしたことを心からお詫びします。阿部一道様は当城に滞在しておられます。このことをすぐにお知らせできなかった理由を、これからお話する経緯でご理解いただければ本当にありがたく思います。

⑨ 先ほどお話をした阿部道隆大佐は阿部一道様の祖父になります。阿部大佐は江田伯爵によって復活

されましたが、この当時の技術では復活の命で再生すると男性の Y 染色体に再生の痕跡が残されてしまいました。このため男子の子孫ではこの遺伝子によって霊的な命が復活の命に変換されてしまいます。このような形で復活の命が増えますと、望ましくない方が復活する危険性が生まれます。それは地球の未来を大きく変えるきっかけにもなり、殊に悪意のある方の復活によって地球に壊滅的な状況が生まれる危険性がでてきます。復活の命がこのような形で増加することは、エデン人が地球の未来を保全しようとしてきた努力に全く反します。その後の研究で、復活の命が遺伝子に痕跡を残さないように改善されました。現在では復活の命で再生した方は Y 染色体に変化が起こらず、従って直系男子に復活の命は形成されません。」

伯爵夫人は復活の命が改善される前の事例を話されました。

「復活の命が悪用された最後の例は、アドルフ・ヒトラーです。彼は画家を目指した若いころにエデン人と知り合い、復活の命の存在を知っていました。その後、彼がドイツ復興の政治活動に参加し、徐々にドイツ国民に圧倒的な支持を得ていきました。そのような彼に協力したエデン人もいました。やがてナチスを率いてヒトラーは独裁者となり、彼に反対する将校たちがヒトラーの暗殺計画をたて、1944年7月20日にヒトラーの臨席した会議室が爆破されました。世界にはヒトラーはこの暗殺を幸運にも逃れて生き残ったと報道されましたが、実はヒトラーは爆死しておりました。

幸い遺体に損傷が少なかったため、親ナチス派のエデン人によってすぐに復活の処理が行われました。復活したヒトラーがその後に引き起こした悪夢はご存じの通りです。そして彼はユダヤ人排斥を徹底しました。それはユダヤ人のシンボルでしたダビデの星がエデン人のものであることを知っていたため、自分の復活の命を操作されることを恐れてユダヤ人とともにエデン人の絶滅を企てたのです。ドイツ敗戦が免れようのない状況を悟ったヒトラーは恋人と自殺を図りましたが、ヒトラーの魔性を知るエデン人達は彼の復活を阻止するためすぐに遺体を火葬しました。このため戦後、彼の遺体は見つかっていません。」

伯爵夫人はこの忌まわしい記憶に耐えるように黙想をされ、目にうっすらと涙を浮かべておいででした。しばらくして落ち着かれたのか、姿勢を正して話を再開されました。

「しかし遺伝子処理のされていない復活の命が最後に残ったのが、阿部家の祖父、父親、そして息子の一道様でした。幸い一道様のお子様はお嬢様であるため遺伝子は受け継がれていません。しかし一道様を介する死者復活の話題が世に知られることになると、一道様の命が狙われる危険だけでなく、ヒトラーのような独裁者や強欲な富裕層の中には競って復活の命を求め、世界を混乱に落とし込む者もあらわれるかもしれません。そして地球の未来は予測できなくなります。」

少し間を開けて伯爵夫人は話を続けました。「阿部一道様の祖父と父上は既にお亡くなりになっていますので、復活の命の遊離は起こりえませんが、阿部一道様は生存されていますので地上最後の遺伝子処理を行う必要がありました。そのことを執事のオットーが一道様に説明してご同意を頂くことができました。併せてご家族にお話することについて、一道様と私たちが話し合いをしました。遺伝子処理の前にお話しして処理に反対ということになれば、処理が遅れるだけでなく世間に死後再生のことが知られ

る可能性が高くなります。このため遺伝子処理が終わってから家族の方にはお伝えすることを了承していただくように一道様をお願いしました。その結果、ご家族の皆様にはご心配をおかけすることになり大変申し訳なく思っています。」

⑩ 私は伯爵夫人の話を聞き終えて次の質問をしました。「夫は現在どんなふうになっているのでしょうか。」この質問に対して伯爵夫人は「一道様はこの城の一室におられます。後ほどご案内します。一道様は現在、遺伝子処理をしていただくため休養していただいています。」

さらに私は遺伝子処理について質問をしました。

「処理には1週間ほどかかります。このためには遺伝子を持たないドナーが必要になり、この度はオットーがドナーになってくれます。最初に一道様とオットーの復活の命を交換します。オットーの復活の命は遺伝対策を受けています。一方、一道様の復活の命はオットーの体内で遺伝対策が行われます。この処理に約1週間を必要とします。この間、一道様はオットーの復活の命の下で過ごすことになり、この間は仮死状態になります。その後、オットーの体内で処理された復活の命を一道様に戻すと一道様の遺伝子は1週間ほどで消滅します。この後再適応のために1週間ほど休養の必要な場合があります。全体で2～3週間程度が必要になります。この処置の実行についてできれば奥様とお嬢様のご了承を頂ければありがたいのですが。」

接見室に集まった人たちは伯爵夫人の説明に啞然としながら傾聴し、現実離れした内容に納得したようなしていないような気持でした。夫の遺伝子処理が本当に必要なのか私に確信はありませんが、とりあえず伯爵夫人の言葉を信じてみようと思いました。娘と妹にも意見を聞きましたが、基本的には私の思いと同じで、二人とも私の判断に任せるとのことでした。警察部長と担当官の話では、夫の失踪を拉致事件として告訴するにしても立証できない可能性が高い、とのことで捜査願いを取下げることになりました。また日本領事館惨事は、事件性がないのであれば領事館としてこれ以上関与しないとのことでした。私は警察と領事館の方にお礼を言い、別れました。

私たちは伯爵夫人と執事に案内されて、夫のいる部屋に行きました。夫は部屋の奥にあるソファに腰掛けていました。普段の夫であれば、私たちをみつけて直ぐに嬉しそうなそぶりをするのですが、今はその様子もなく、少し気落ちして私たちに心配をかけて申し訳ないという態度でした。娘が夫をみて飛んで行き「パパ、大丈夫？」と言いながら夫に抱き着きました。これまで抑えてきた涙が両眼からあふれ出し娘の頬をキラキラと輝かせていました。少しの間、二人の様子を見てから「あなた、どこか具合の悪いところはないの。」と私が尋ねると、「いや、特に悪いところがあるわけではないよ。伯爵夫人から聞いたと思うけど、僕の遺伝子を洗浄しなければならないので、君たちにこれまで心配をかけているのに、その上に不安にさせるようなことが重なり、本当に申し訳なく思っている。」「私たちひどく心配しているけど、あなたが頑張っているのだから私たちも頑張るわ。妹の幸子が私たちを助けるためドイツまで来てくれたの。」「幸ちゃん、ありがとう。迷惑をかけるね。」「お義兄さん、心配しないで。病院の方は副院長と事務長が頑張ってくれているし、昨日も、病院はうまくいっている、と連絡があったわ。」「そうか、病院の皆にも迷惑をかけているね。」と私たちの会話が続きました。この間、娘はずっと夫の膝の上で夫に抱き

着いていました。私は「遺伝子洗浄はいつから始まるの。」「早ければ明日からだと思う。始まったら2週間くらい、十分に話もできないと思うけど、心配はしないで。洗浄が済んだら皆で元気に日本へ帰ろう。」と夫は元気さを装った声で話しました。

私たちは夫が疾走してからのことを話し、夫はフリートベルク城に来てからの様子を話しました。1時間ほど立ったでしょうか、伯爵夫人と執事のオットーがやってきました。「もし、ご都合が悪くなければ当城の客間を滞在中お使いください。食事もよろしければ私共とご一緒にしていただければと思います。マインツのホテルにお荷物を置かれていますので今夕、ホテルにお送りし、明朝はお荷物を持っておいでいただけるよう使いの者を寄こしますが、如何でしょうか。」私はお礼を言って伯爵夫人のご厚意に甘えることにしました。

①夫の遺伝子の洗浄処置が始まりました。夫とオットー、そして私たちは城の地下にある研究室に案内されました。部屋の中央に2つベッドがあり、そのベッドは1mほどの距離を置いて並行に設置してありました。研究室は驚いたことに古城の地下にあるとは思えないほど未来的な部屋でした。ほぼ正方形の部屋で、照明灯はないのに白い清潔な壁や天井から柔らかな白光が放たれていました。そのため手術室の无影灯のようにどこにも影がありません。一つの壁に大きなスクリーンがあり、ベッドの間には遺伝子洗浄に使う装置と思われる黒い箱が置いてありました。その箱から太いパイプが2つのベッドの台座に接続してあります。ベッドには全身を覆う大きさの透明な蓋があり、今は開いたままでした。白い宇宙服のような作業衣を着た4人の技師がベッドわきに立っていました。夫とオットーがガウンを脱ぐと二人は特殊なスーツを着ており、スーツには数個のパイプ接続口が開いていました。技師から指示されて、二人は無言でベッドに横たまりました。技師がベッドに内装されたパイプをスーツの接続口につなぎました。伯爵夫人はパネルの側にある椅子に座り、私たちは伯爵夫人の近くに置かれた椅子に座るよう指示されました。娘はこの緊迫した状況に泣きそうな顔をしていました。

伯爵夫人が私たちに向かって「それはでは始めたいと思いますが、その前にご主人様に何か話をされますか。」と尋ねました。私は軽くうなずいて娘と妹を連れて夫のベッドの側にいきました。夫は私たちを顔に向け、うなずきました。「あなた、頑張ってるね。」「パパ、死んじゃ駄目よ。」「お義兄さん、私たちもお城に滞在していますから。」とそれぞれが声を掛けましたが、他に話すべきことは何も思いつきませんでした。伯爵夫人が「それでは始めますが、よろしいですか。」と声を掛けましたので、私は「宜しくお願いします。」と答えました。それを合図に4人の技師は黒い箱に指示を出すためにノートサイズのリモート・コントロール・パネルを操作しました。すると黒い箱の側面に四角い青ランプが点滅し、透明なカバーが縮まりました。夫もオットーも透明な蓋付の棺に納められた遺体のように見え、思わず身震いがしました。何の物音もしないため何も始まらないのではという不思議な気持ちになりました。

夫の様子を見ていますと、やや緊張した面持ちで天井を見つめていましたが、透明な蓋が閉められて間なしに、目を閉じるとそれまでとは違った穏やかな表情になりました。オットーも同様に和らいだ表情で眠るように見えました。ヴァイタル・サインには異常を認めないようで、技師たちは伯爵夫人に報告をして伯爵夫人は大きくうなずきました。そして「皆さん、洗浄処置は問題なく始められたようです。今後、

ヴァイタル・チェックや栄養・排泄管理などは技師たちが交代で行います。1週間ほどで全過程が終了しますのでお二人は覚醒状態に戻ります。それからほぼ1週間は安静が必要です。その後は通常の生活が可能です。それで変わりなければ完了となります。それまでの期間は当城に宿泊していただければと思います。」

夫の様子は透明な蓋越しにいつでも見ることができました。夫は穏やかに寝ているように見えました。娘も最初は夫の様子を見て怖がっていましたが、徐々に安心してきたのか、蓋越しに「パパ、眠っているの。」と声を掛けるようになりました。伯爵夫人とは夕食の時間に顔を合わせる事が多く、伯爵夫人ご自身の事、亡くなられた江田伯爵の事、執事のオットーの事など、の話題がありました。これまでに地球の歴史の中で放たれた復活の命を制御して誤った死者復活による人類崩壊を防ぐことは、亡夫の遺志であり、また夫人の残された人生の課題でもあると話されていました。しかし、夫の失踪というこの方法とは異なるやり方もあったのではという思いもあり、どこか納得のいかない気持ちを解消することはできませんでした。そして1週間がたち、夫が覚醒する日が来ました。

技師たちが小さなコントロール・パネルを操作して夫とオットーが静かに目覚めてきました。頬がこけて少しやせていました。透明な蓋が開き、夫の顔がもっとはっきりと見えるようになりました。夫は私たちを認めて、笑顔になり顔色もピンク色になりました。オットーは伯爵夫人を見て会釈をしました。伯爵夫人も「お疲れさまでした。」とオットーと夫に優しく答えていました。二人はストレッチャーに移され、それぞれの部屋に戻りました。部屋に戻ると夫はストレッチャーから降りてベッドに移されました。1週間背臥位でいたため手足の筋力が落ちて歩行するのにも介助が必要でした。その後、夫は再び静かに眠りにつきました。夕食のスープは手つかずのままでした。翌朝からリハビリが始まり、夫の歩行状態や食欲は日ごとに回復し、家族とも会話ができるようになりました。

⑫夫が仮死状態の時に体験したことは次のようでした。

「僕は命の故郷[フルサト]で自由に時空間を浮遊しているようだった。そこには様々な人が漂い、世界中の都市や大自然が現れては消え、現在から遠い過去に一気に移ることもできた。僕が期待するとその人物や場所があらわれた。例えば、僕がベートーヴェンのことを考えると、小川の流れる森の小道を僕は歩いていた。小鳥のさえずりや小川の奏でるせせらぎが僕に安らぎ与えた。すると小道の向こうから二人の男性が話をしながら歩いてくるのがみえた。そのうちの一人はまぎれもなくベートーヴェンその人であった。そして隣には何とブラームスがいた。僕は舞い上がらんばかりの気持ちを抑えて、ベートーヴェンに『初めまして。私は日本から来ました阿部一道といいます。私はあなたの力強い音楽で幾度も勇気づけられてきました。本当に感謝しています。』といいますと、ベートーヴェンは『よく存じています、阿部さん。あなたが私の音楽をどれほど愛してくれているか、私は言葉では言い尽くせないほど喜んでいきます。』会話をしているというよりベートーヴェンの思いがそのまま僕の心に届くように思えた。言い換えれば、言葉で語り合っているというよりは、心と心で通じ合っているようだった。すると隣のブラームスが『今日は、阿部さん。ベートーヴェン君と話しながら散歩をしていると、君の姿が目に入り、思わず阿部さんだと二人で相槌をうちました。』僕はどぎまぎしながら『ブラームスさん。お目にかかれて本当に光栄です。ブラームスさんの心安らぐ音楽で私はいつも癒されてきました。』と答えた。こんな具合

に、会おう人は時代や言語が違っていても何も隔たりがなく心で通じ合った。また、出会った人たちは私がイメージをした姿で現れるのでベートーヴェンもブラームスも同年齢のように見えた。」

夫はさらに話をつづけました。

「多くの人たちに会ったが、それはその人たちを遠めに眺めたという印象ではなく、相手の温もりを感じるほどに近くに寄り添い、一人一人深く心を通わせることのできる出会いであった。命の故郷では時空間に分け目はなく、命が網の目のように繋がっていることを体験した。そこには天国も地獄もない。命が一つ一つ夜空の星のように輝く世界だった。僕たちの肉体から離れた命は、時空間を超えて飛び交い、新たな活力を受け継ぎ、そして生まれたばかりの肉体に住み着き、肉体と共に一つの人生を全うする。命は循環する。人は命で繋がり、誰をも受け入れ、互いに争わない。人は命で愛を育み、誰をも見捨てず、互いに向上させる。命の世界を感知できれば誰もが至福を体験できる。」

「他にも僕はこんな体験をした。僕がモンマルトルを歩いていると、あるアパートマンの前でゴッホ兄弟に出会った。フィンセントとテオだ。僕は数分間、彼らと会話をしただけなのに、彼らの思いや情熱が全て僕に伝わってきた。そして互いに深く理解したことで、お互いに受け入れることができた。二人と別れて僕はモンマルトルの長い石段を下りながら、ゴッホのヒマワリの絵を考えていた。と、その時、誰かに呼び止められたように思い後ろを振り向くと、そこは見渡す限りにヒマワリの咲き乱れる丘陵で、青空の下に地平の彼方まで黄色の毛氈を広げたような美しい景観だった。

僕はここに一度も訪れたことはないが、ここが 2021 年 7 月のウクライナ・ドネツク州の農村であることを知っていた。ひまわり畑の一角にある小高い丘に 1 本の大きなナラの木が青々と茂り、その木陰に一人の青年が腰かけて本を読んでいた。その青年に会うのは初めてだが、彼がジトムイル・ダニューレンコという 22 歳の青年であること、この近くの村に 3 歳年下の妹と暮らしており、両親は既に他界していること、青年は大学で医学を勉強し村人の幸せのために力を尽くしたいと願っていることなど、まるで僕が彼の長い知己であるかのように彼のことを知っていた。彼も僕のことを知っており、僕の姿を見て笑顔で軽く会釈した。しかしこれから彼を襲う悲惨な運命を彼は知る由もない。2022 年 2 月にロシア軍がウクライナに侵攻し、彼はウクライナ軍に招集されてロシア軍との泥沼の戦闘の中、23 歳の若さで妹にもらったお守りを握りしめて息絶え、同じ年の暮れには彼の妹もロシア軍兵士に凌辱され遺体は凍り付いた泥沼の中に捨てられる、など。僕はこの純真な青年におこる運命の冷酷さに心が痛み、目を伏せたまま涙の味をかみしめて静かにその場を去った。」

以上が、夫の失踪事件に関係して私の経験した全てです。夫は遺伝子洗浄処置を受けている間、仮死状態に陥っていたのでしょう。夫の体験を通して考えさせられたことは、私たちの死は一人の孤独な終焉ではなく、命の世界では古今東西の人々に繋がり、新たな人生との出会いに導かれていく船出なのだ、ということです。いいえ、死後だけでなく生存中でも、あまたの命と目には見えない網で繋がっており、私たちは決して孤立した存在ではないということです。ですから私たちは目の前の人々とだけでなく、目には見えていなくてもその人々の背後に繋がる大勢の人たちとも影響を及ぼし合っているのです。命は全ての哲学や宗教、科学や芸術の基礎ですし、命を慈しむことはおろかな戦争や環境汚染を防ぐことに

なります。そして夫の貴重な経験は、夫自身だけでなく私たち家族にも生きることを問う出来事だったと思います。遺伝子洗浄からすっかり回復した夫と共に、家族4人で残り1週間、ドイツ旅行を楽しんで帰国の途に就きました。